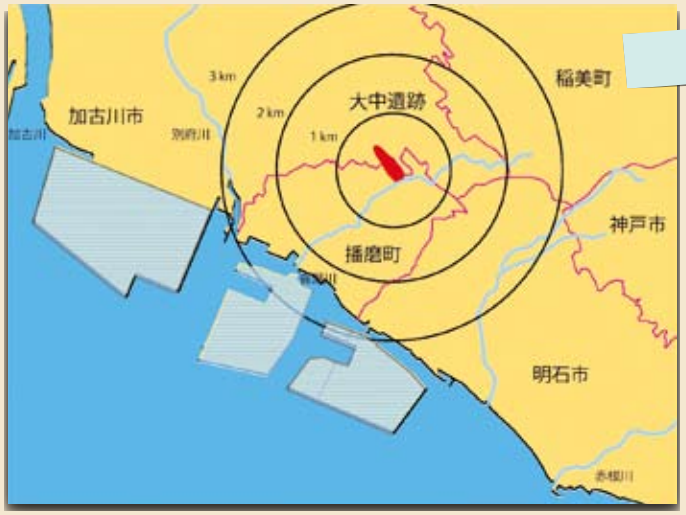
オポナカムラ彩発見!!

オポナカムラは古代語で「大中村」の意。
国指定史跡「大中遺跡」の最新の調査をもとに、様々な観点からふるさとの誇れる遺跡について考えてみたいと思います。

【問い合わせ】郷土資料館 ☎079（435）5000



播磨町マスコットキャラクター
いせきくん、やよいちゃん

4 突然現れ、消えていった村!?

大中遺跡は、およそ1900年前から1750年前の弥生時代後期に、たくさんの人たちが住んでいた大きな村のあとです。多い時には、25軒くらいの家があり、100人余りが暮らしていたと考えられています。そのころ貴重品だった中国製の鏡を持っていたので、播磨では有力な村でした。

ところが、大中遺跡周辺は、加古川や明石川の流域に比べて弥生時代の遺跡が少ない場所です。大きな理由は、遺跡周辺に田んぼを作れる場所が少なかったからです。また、弥生時代の海岸線は遺跡から近く、すぐ漁に出られたから村ができたと考えられていましたが、海岸線は今とほとんど変わらず、海から2キロも離れており、生活するには決して便利な場所ではありませんでした。

では、どうしてここに大きな村ができたのでしょうか?

広報4月号に掲載した昭和41年当時の写真を思い浮かべてください。大中遺跡の北側には広大な潰目池があり、西側の住吉神社の向こうまで広がっていました。また、南側にも大きな狐狸ヶ池があり、東側には喜瀬川が流れているなど、ほぼ四方を池と川に囲まれた丘の上に遺跡はありました。

弥生時代もほとんど同じような地形であったと考えられ、村は川と湿地帯に囲まれた、まさに「自然の要塞」でした。

一方、弥生時代中期の終わりごろから洪水がよく起こり、家が水に流されたり作物が収穫できなかったり、また、漁に出ても獲物が手に入らなかったりするなど生活は安定していませんでした。そのため、戦いや争いが絶えず起こっていたようです。人々は、安心して安全に暮らせる場所を求めて移り住み、「オポナカムラ」の人口は、急激に増えていったのです。

しかし、150年近く立つと（古墳時代がはじまる3世紀ごろ）、播磨では、大きな争いがほとんどなくなり、村人は稲作に適した土地を求めて周辺に移り住み、村はその役割を終えました。

時は過ぎて、1974年（昭和49年）、播磨大中古代の村（大中遺跡）が開村しました。このころから神戸・大阪のベッドタウンとして播磨町の人口は急増し、今では3万4千人が住むまちとなりました。「安心と安全」は、今も昔も変わらないようです。

町の人口 6月1日現在（住民基本台帳人口＋外国籍人口）
34,215人（＋7人） 男…16,806人（－1人） 女…17,409人（＋8人） 世帯数…13,605（＋22）

広報はりま 発行／播磨町役場 〒675－0182（個別番号） 兵庫県加古郡播磨町東本荘1丁目5番30号 TEL 079（435）0355 FAX 079（435）0609 編集／企画グループ 印刷／明光印刷
播磨町のホームページアドレス http://www.town.harima.lg.jp
〃 Eメールアドレス kikaku@town.harima.lg.jp

PRINTED WITH SOY INK
Trademark of American Soybean Association